

第1章

工具書

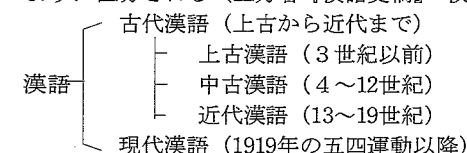
第1節——工具書の役割とその範囲

農作業には農具、工作には工具が必要のように、古典を読んだり文献を整理・研究するときにも道具が必要である。この道具を工具書という。工具書とは、図書を利用したり、資料を捜したり、難しい言葉の意味を調べる、これらを補助する書籍の総称である。難しい文字があれば字典や辞典を調べ、見なれない書名があれば目録を調べ、ある領域の知識を理解するためには類書（古代の百科事典）を調べ、学術の動向を調べるには論文索引などを利用する。これらの字典・辞典・目録・類書・索引などを工具書という。古典を読む能力を高めるためには、専門領域のレベルアップをはかったり、古代漢語¹⁾の知識を充実させるべきだが、それ以外にも工具書の使い方に習熟することも必要である。そうすれば、独自に研究し、問題を解決する能力を養うことができる。

いくらすぐれた工具書でも万能なわけではない。系統的で深い知識を得るためには苦しく長い作業が必要である。私たちは寄せ集めの「記問の学（暗記一点張りの学問）」にとどまっているわけにはいかない。高い山をきわめるような強い意志で古典を学び、中国医学の遺産を継承し、発揚させ、多くの貢献をなすべきである。

ここで紹介する工具書の大部分は解放（1949年の中華人民共和国成立）以前に出版されたもので、必然的な欠点を含んでいる。したがって、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想の観点から分析し、批判し、悪いものを棄て去り、良いものを採り入れることが必要である。この原則は、しっかり記憶しておかねばならない²⁾。

1) 漢語とは漢民族の言語という意味である。一般に日本語でいう中国語に相当する。時代によって次のように区分される（王力著『漢語史稿』『漢語史の時代区分』による）。



2) 今では「10年動乱」と否定的評価を受けている文化大革命の熱狂はいささか衰えたとはいえ、本書が出版された1980年代初頭の出版物には、このような社会主義国家建設を鼓舞する文章が必ずといっていいほど見られた。理科系の書物もその例外ではない。

第2節——字典と辞典

古典を読むときに、見慣れない文字や語句があったり、よく見る文字でも通常の意味と大きく異なる場合は、その内容は理解し難くなる。これを解決するには字典や辞典が必要になる。本節では常用される字典や辞典を紹介し、その使い方を簡単に説明する。

1. 検字法³⁾

字典や辞典などの工具書は速やかに検索ができなければならない。一般に用いられる検字法には、部首検字法・韻部検字法・音序検字法・四角號碼検字法⁴⁾・画数検字法・筆順検字法がある。よく使われているものもあるし、あまり使われていないものもある。ゆえに、ここでは次の2つの方法だけを紹介する。

部首検字法

部首とは何か。漢字は少数の独体字を除いて、ほとんどはいくつかの部分で構成された合体字であり、それには共通する部分がある。この共通部分を部首、あるいは偏旁という。たとえば、江・河・浮・沈は水部、炒・炙・烟・烤は火部、疫・病・痛・瘡は疒部、盲・胃・肢・膏は肉部、または月部に属す。この部首をもとに文字を検索するのが部首検字法である。

『康熙字典』は漢字を214部首に分類し、配列している。その214部首は、子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥の12集に分けられ、各集はさらに上・中・下に分けられる。

子集：一丨丶ノ乙丁二一八入八門一フ几口刀力勹匕匚匚十卜尸ム又

丑集：口口土土土夕夕大女

寅集：子ㄣ寸小九尸山ㄣ工己巾干幺广弘升弋弓彡彡

卯集：心戈尸手支支文斗斤方无

辰集：日日月木欠止歹母比毛氏气

巳集：水火爪父爻月片牙牛犬

午集：玄玉瓜瓦甘生用田疋疋白皮皿目矛矢石示内禾穴立

未集：竹米糸缶网羊羽老耒耒耳聿肉臣自至白舌舛舟艮色

申集：艸疒虫血行衣而

酉集：見角言谷豆豕豕貝赤走足身車辛辰辵邑酉采里

戌集：金長門阜隶隹雨青非面革韋非音頁風飛食首香

亥集：馬骨高影門鬲鬲鬼魚鳥鹵鹿麥麻黃黍黑黽鼎鼓鼠鼻齊齒龍龜龜

部首検字法の注意点

1 どの偏旁が意符かを探す

字典の帰部（個々の漢字がどの部首に属するか）は意符を主とするのが原則である。左側の偏旁が意符のもの、たとえば骼・髓・體・髀は骨に関係があるので骨部に属す。右側が意符のもの、たとえば頤・頤・頤・頤は頤と関連があるので頤部に属す。上部の偏旁が意符のもの、たとえば宮・室・客・宇は宀部に属す。下部の偏旁が意符のもの、たとえば孟・盆・盤・盞は皿と関係があるので皿部に属す。音符が中央にあり意符が周りを囲むもの、たとえば園・圃・固・国は囗部に属す。音符が中央にあり意符が左右に分かれるもの、たとえば衡・衡・術は行部に属す。意符が上下に分かれるもの、たとえば衷・衷・衷・衷は衣部に属す。

部首表に習熟して部首の順序を憶える必要がある。また、『説文解字』が540部、『康熙字典』『中華大字典』『辞源』『辞海』が214部、1965年に再編された『辞海』（原注：未定稿）が250部であるように、字典によって部首が異なることも知っておく必要がある。

2 部首の変体（異体）に習熟しなければならない

変体とは、同一の部首がその位置の違いによって変化したものである。たとえば、思・想・愉・快・恭・慕の心と忄は心の変体である。イと人、リと刀、尸と巳、彡と水、月と肉、これらも同例で、細心の注意が必要である。

業・夷・興・奥のような部首がわかりにくい漢字は、付録されている検字表で画数を調べ所在ページを見つける。

3 部首自体が独体字である場合は注意が必要である。

たとえば、音は立部でも日部でもなく、言は一部でも口部でもなく、豆は一部でも二部でもない。それ自体が部首なのである。

3) 中国の工具書には、索引は1種類しか付いていないことが多い（最近では改善されているが）。だから、いろいろな検索法に慣れていないと、調べるのに難儀することがある。わが国の工具書には親切な索引がついていることが多いので、本節のような検字法についての解説はいらないかもしれないが、中国版の工具書を使うことも多いので知っておいた方がよい。

4) 1926年に、王雲五が考案した検字法。「四角」は漢字の左上・右上・左下・右下の4すみのこと。「號碼」は番号の意味。具体的な利用方法は、『大漢和辞典』『大漢語林』（ともに大修館書店刊）を参照。